様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５２０１９

研究課題名（和文）戦時下の展示空間ー１９３０年代の東京とソウル

研究課題名（英文）Exhibition Space during the War Time: Tokyo and Seoul in the 1930s

研究代表者
五十殿　利治（OMUKA, Toshiharu）

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：６０１７７３００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：　1930年代の東京では公的な美術館に加えて、私設の展示空間が拡大した。その背景には美術の専門学校の増加、美術ジャーナリズムの充実などがあったが、とりわけ銀座を中心にした画廊が急進的な表現を求める青年美術家のグループ活動を支えることになった。ソウルにおいても、この時代には、現在もその建築の一部が現存する三越デパートの画廊など、私設の展示空間が充実した。戦時下であったが、こうした現象が戦後の美術活動の苗床となったといえる。

研究成果の概要（英文）：In addition to public art museums, private exhibition spaces increased in the 1930s Tokyo. This was due to increase of art colleges, development of art journalism and so on. The galleries in the Ginza area supported groups of young artists who sought for radical expression. In Seoul, too, private exhibition spaces were enhanced such as one at the Mitsukoshi department store. These phenomena were in the war time but turned out to be a seed bed for the post-war art activities.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：展示空間　国際研究者交流

１．研究開始当初の背景

本研究代表者五十殿は「初期画廊」のひとつである「日比谷美術館」について基礎的な研究に着手し（平成 3 年度科学研究費補助金報告書「日独近代化過程の比較文化的研究」）、また『資生堂ギャラリー75 年史』（1995 年）では編集委員（主として大正期担当）として協力するなど、本研究の対象とする時代より以前の時期については調査を手がけたことがある。

先行研究として『日本洋画商史』（1985 年、改訂版 1994 年）があるが、この間、研究面で大きな進展がなかったといえる。そのひとつの理由は資料収集の困難に帰着する。公的な施設とは異なり、私的な画廊は大半が短命であり、もともと資料が散逸しやすいのが実情である。

一方で、五十殿はソウル大学の金英那教授とともに、2008 年明治美術学会主催による日韓近代美術史交流シンポジウムで「都市と視覚空間―1930 年代の東京とソウル」を企画したが、とくに韓国側の発表から両都市文化の同時代性について認識を新たにした。当該の時代は、大規模な万国博や公募展の「展覧会芸術」とは別の可能性を示す画廊の小空間は作家の造形意図を実現するに好適な空間となったことを本格的に検証すべき対象として理解するに至った。

本研究においては、上述のように時代については大正期から昭和戦前期と限定するとともに、場所も東京、とくに銀座が焦点となる。主な検討対象としては、当時青年美術家の個展・グループ展のメッカとなった紀伊國屋ギャラリーを中心として、日本サロン、日動画廊、三昧堂、ブリュッケが挙げられる。一方、京城については、三中井や三越といった百貨店やカフェの展示空間が主要な場であった。

こうした空間での展示風景は個人が撮影したものについては個人画集等で掲載されることがあるが、限定的であり、同時代美術雑誌や新聞に掲載されている会場写真がもっとも入手しやすいし、個人の資料とは異なり、撮影場所等の事実関係の確認が容易である。これまでこうした写真資料は系統的に収集され比較検討されることはなかったので、こうした展示写真の精密な分析により美術史の実相を把握することを試みる。また、すでに交流のある韓国の専門家と合同研究会を開催することにより、両都市の美術活動の異同を確認し、さらに、同時代の日本人作家も関係することから、東アジアを視野にいれた共同研究の可能性をさぐる。

２．研究の目的

美術作品の展示は評価と深い関係がある。しかし、近代日本美術史においては美術作品がどのように展示されたのか、実証的な研究は不十分である。とりわけ、私設の展示空間（画廊）については、画商の研究が先立ち、検証が遅れている。本研究では、これを 15 年戦争期の画廊を主要な対象として、万国博における「国家表象」の展示や官展等における「展覧会芸術」への対抗文化として、また美術家の表現意識が相対的に自由に発露した空間として考察する。

その際に、同時代の帝国日本の植民地、とくに同種の空間が成立し始めた京城（ソウル）を視野に入れて検討する。こうした展示文化は、貸画廊における個展形式として戦後に引き継がれており、日本近代・現代美術のひとつの重要な基層としても見逃すことができない。

本研究は、画商の研究を進めるものではないが、画商の社会的機能を否定する意図はないし、今後も展開されるべきテーマであると考える。本研究の関心事はあくまでも展示作品と展示形式であり、また展示をした作家の存在である。

これまで展示の歴史は軽視されてきた。上述の日比谷美術館（1913-15）のほかにも、近年では赤坂溜池の三会堂（1908-22）での展覧会を一覧表にして公表した。その結果、たとえば三会堂の隣接地に黒田清輝の開設した葵橋洋画研究所が位置していたことが施設利用の一因であることを明らかにした（「大正期における美術鑑賞環境についての一考察」、「ミュージアムの活用と未来　鑑賞行動の脱領域的研究　平成 18 年度報告書」）。だが、この展示会場内の展示写真がほとんど残されていないので、粘り強く調査を進める必要がある。

本研究では、上記のように調査対象をまず美術雑誌に絞りこみ、系統的な収集と分類、そして分析を行うものである。諸美術雑誌は 1920 年代半ばから、展評のみならず、会場写真を積極的に掲載するようになるので、本研究は十分な成果を期待できるものといえる。

３．研究の方法

(1)視覚的資料の多角的検討の重要性

本研究は、着実に視覚的資料を収集し、的確に分類し検討することを目指す。その成果においては、当該の時代の美術動向の研究に不可欠な基礎資料を構築するものと期待できる。

たとえば、主要な対象の一つである「日本サロン」については、1937 年 6 月の「海外超現実主義作品展」が開催された空間として歴史に名を残している。しかし、これまでこの画廊については注目されず、したがって本格的に論じた研究はない。

日本サロンはもともと写真家西山清が前年 10 月に開設したものであり、写真展専門の会場として意図されていた。斬新な設計であり、さっそく当時の建築雑誌『新建築』11

月号に取り上げられ、いかにもモダンな空間として紹介されている。
　実際には、おそらく経営的な戦略から、絵画展も開かれるようになったが、当初 1-2 階すべてが展示スペースであったところが、おそらく経営不振からだろうが、1937 年 5 月までには 1 階が喫茶店に改装された。またその際と考えられるが、2 階を画廊空間として充実したものとした。開設当初の写真と、不鮮明であるが『VOU』誌に掲載された不鮮明な「海外超現実主義作品展」の会場写真を比較すると、上階の空間がかなり広がっている事実が確認できる。

(2)美術現象の解明とその意義
　つまり、瀧口修造らが作品を展示したのは 2 階であったということになるし、展覧会実現に関係した瀧口、山中散生、そして大下正男が作品の前に立つ会場写真（『みづゑ』1937 年 8 月）からも、2 階であることが確認できる。このことは、370 点という作品が実は会期中に展示替えがあり、二度に分けて紹介された可能性さえ示唆している。
このように従来の研究には、展示や展示空間に対しての関心が希薄なところがあり、そのことによって見失われている美術現象が存在している。本研究が挑戦したいのは、そうした空間がはらんでいた創造活動の軌跡を掘り起こし、その美術史的な意味を確認することである。

４．研究成果

(1)本研究の眼目の一つであった銀座の私設画廊の研究では、明治美術学会誌『近代画説』において銀座 2 丁目にあった「ブリュッケ」について研究論文を公表することができた。この画廊は短命であったが、その活動は同時代のモダニズムの動向との密接な関わりを示すものとして瞠目すべきものがあったことを実証した。この画廊の実践としては柳瀬正夢にジョージ・グロッスに関する資料展覧会が広く知られていたが、他の展覧会、とくに瑛九と北尾淳一郎の二人展の目録や芳名帳を公刊したし、さらに開催予告のみ確認されて実現したかどうか不明であるが、ベルリンのイッテン・シューレの練習作品展についても、同時期に来日し、自由学園とも代わりがあったエヴァ・プラウト Eva Plaut との関わりを調査して、さらにこの画廊の際だった独自性を特徴づけた。

(2)私設の画廊の対極に位置するといえるのが公共的な展示空間であるが、これについても研究成果を公表する機会を得て、1910 年代から美術館というものへの関心の高まりを背景として成立した東京府美術館以後の展示空間、とくに従来ほとんど美術史的な文脈では十分に考慮されていない採光と照明の展開、美術館設備の充実、さらには近代美術館と現代美術館という概念の展開について、研究成果を発表した。

(3)本研究活動の期間中二回、2012 年 1 月 28 日、そして同年 7 月 27 日に韓国の研究者、金英那（韓国国立中央博物館長）、睦秀炫（ソウル大学研究員）、Younjung Oh(南カリフォルニア大学大学院）を招いて、筑波大学において研究交流会を開催し、1930 年代を中心とする多様な展示空間についての議論をした。
　睦はとくに当時のソウルにおけるデパートやカフェの展示空間について情報を提供する一方、近代日本美術を専門とする Oh は、百貨店美術部と新中間層の消費という点から考察を加えた。また五十殿は銀座の画廊「ブリュッケ」と「日本サロン」の活動について、大学院生江口みなみが近代日本画のディスプレイという観点から展示空間について話題を提供し、議論を深めた。
　また、ソウルでも実地調査を行った。金英那との研究交流のほか、睦とともに、現存する当時の展示空間、たとえば三越デパート、1938 年に建設された中村與資平設計の李王家美術館（現国立徳寿宮美術館）について視察を行った。

(4)さらに、展示空間の研究について、表現手段を展示する形式や場所を考えることなく選択することはないという立場に立って、1930 年代に限定せずに、より広く史的にその展開について観察することを試みることになった。
　そのひとつの成果として、代表的な前衛画家（萬鉄五郎、村山知義、長谷川三郎）が撮影した自写像等における肉体を考察対象として 1910 年代から 30 年代における展示空間の状況を浮き彫りにしている点を検証することになった。計画通りに、この発表はアメリカのアジア学会において英語によって行った。いずれ日本語においても研究論文にまとめて発表する予定である。
　単純化していえば、萬の時代には私設の展示空間は公的な展覧会以外は、1910 年に日本最初の画廊といわれる高村光太郎の琅玕洞が開設されたように極端に少なく、肉体を写した写真もまた展示を前提としないものであった。ところが村山の時代も画廊はいぜんとして少ないが、しかし肉体の誇示という点では異質な空間、カフェあるいは戸外さえ求めることになった。
　反対に、東京府美術館が設立され、また私設画廊が充実する昭和戦前期になると、プロレタリア美術の弾圧そして時局下で表現は内向化し、かえって肉体の露出は規制される傾向となる。地表に映る自分の影を撮影し、扁平で希薄な自分の肉体を表現した長谷川の中国における写真を、自分のアトリエにこもって油彩として展示することが可能であったことを考え合わせるならば、30 年代末の展示空間に関わる情勢をも示唆していると

考えられる。
　なお、こうした議論についてアメリカの学会ではディスカッサントより、肉体の露出に伴う不安の存在を無視できないという指摘があった。この不安は長谷川の希薄な自写像についてはまさに当該の時代における創作活動にかかわるさまざまな圧迫を示すものであると考えることができる

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①五十殿利治、近代美術館から現代美術館へ、美術運動史研究会ニュース、140、2014、1-5、査読無

②五十殿利治、一九三〇年代東京の展示空間とモダニズム　―　ギャラリー「ブリュッケ」について、近代画説、20、2011、56-70、査読無

〔学会発表〕（計 2 件）

① Omuka Toshiharu, Male Bodies in Prewar Japanese Avant-Garde Art and Exhibition Spaces, Panel 283: Visualizing the Male Body in Japanese Arts, 1920s-1950a, Chaired by Maki Kaneko, Association for Asian Studies Annual Conference, March 29, 2014, Philadelphia, USA.

②五十殿利治、近代美術館から現代美術館へ、東京国立近代美術館 60 周年記念シンポジウム「近代美術館の誕生－前史から未来へ」、2012 年 12 月 1 日、東京国立近代美術館（東京都）

〔その他〕
予稿集
①五十殿利治、近代美術館から現代美術館へ、東京国立近代美術館 60 周年記念シンポジウム「近代美術館の誕生－前史から未来へ」予稿集、2012 年、6-7

６．研究組織

(1)研究代表者

五十殿　利治（OMUKA, Toshiharu）
筑波大学・芸術系・教授
研究者番号：60177300